

グローバルなつながりをつくる教育

(原文)

笠原 大夢 (18 歳)

東京都

早稲田大学高等学院

5月24日、ヘイトスピーチ規制法が成立し、メディアでたびたびその言葉を耳にするようになった。日本で行われているヘイトスピーチのほとんどが、在日韓国人・中国人などに対する人種差別の内容になっており、法案成立後すぐに開催されたヘイトスピーチのデモも、在日韓国人に対する民族差別を煽るものだった。このようなことをして、一体意味があるのだろうか。暴言は怒りの感情しか生みず、誰にとっても利益なんかないのに。私自身は、クラスに仲のいい外国籍の友達が複数人いるので、差別意識を持ったことがなくよくわからない。しかし、多数の外国人に対して偏見を抱いてしまうのは、相手のことをよく知らず、表面上の知識だけで判断してしまうのが原因なのではないだろうか。そこで、外国人への差別意識をなくすためには、どのような知識・学びが必要なのか考えてみる。

人の感情は、漠然とした自分の思いや感覚に「言葉のラベル」を貼り付けることによって、意識上に明確化している。なので、その思いや感覚にどのような言葉のラベルを貼るかによって感情が変化する。「差別意識」の感覚は嫌悪感や違和感からきていて、それは相手や対象物に対する情報不足により生ずることがほとんどだ。例えば、食わず嫌いと同じ感覚のこと。ですから、嫌悪感・違和感は相手をよく知るによって解消される。

しかし、実際知ってみたらもっと酷かったということもあるだろう。それは、人は自我を保つために自分が一番正しいと感じるようにできているからで、同時に自分のことを認めてもらいたいとも思っている。皆がこの様な望みを持っているから、相容れない人が出てくるのは当然だといえる。そういう矛盾した存在こそが人間だ。そこでその矛盾を解決するのが理性や知性であり、理知による思考となる。その理知による思考によって、相手の考え方を理解するならば、この人にとっては正しいことだったのだろうと客観視することが可能となり、これができるようになると違和感等の感情が停止する。そうすれば、どんな人でも受け入れることができるようになるだろう。

そこで、これらをどのように学べばいいか考えていく。お互いを知るためには、やはり会って話すのが一番。しかし、実際に外国の人と一緒に会って交流するとなると、行事として開催し、年に数回しか開くことが出来ない。必要としているのは、相手を深く知るために多く交流すること。まずやらなくてはならないことは、外国人とコミュニケーションをとるために、共通語である英語を早い段階で使えるようにする必要がある。なので、義務教育が始まる小学校 1 年生から本格的に教育し、6 年

間で文法を学ぶ。そして、中学3年間でコミュニケーションの英語を学び、基本的な会話には困らないレベルまでもって行く。それが出来た前提で、高校からは新しいカリキュラムとして、「人間学」と「異文化交流授業」を取り入れる。「人間学」では、答えのない人の感情や行動心理を学び、そもそも人間とはどういうものなのかを、学ぶのではなく考察していく。そしてそれが、人のつながりをつくる技となる。「異文化交流授業」では、時差の影響も考えて、同時に授業を受けることが出来る複数の外国の学校と、テレビ通話でつながる。内容は討論の形をとり、議題は政治的なことから生活のちょっとしたことまで様々なことを取り上げる。行事として、毎年1回授業を受けている学校の国どれかに修学旅行として訪れ、実際に会って交流する。

このカリキュラムを用いることにより、外国人に対しての偏見がなくなっていき、国籍だけを見るのではなく個人を見るようになる。そうすれば人種差別はもちろん国際問題の改善も見込めるのではないだろうか。これからのグローバル社会を変えていくには、個人がつながる教育が必要になっていくだろう。